

高齢・過疎地域における高齢者の生活を支えるつきあいの広がりに関する研究

A STUDY OF THE VARIOUS ASSOCIATIONS SUPPORTING LIFE OF THE OLD PEOPLE IN AN AGING AND DEPOPULATED DISTRICT

古川 恵子*, 友清 貴和**

Keiko FURUKAWA and Takakazu TOMOKIYO

The purpose of this study is to research how the old people in some aging and depopulated districts are supported by their associations with other inhabitants, peculiar to rural or fishing villages, and to show that these districts still function effectively as communities where the members are connected by mutual support.

Our research has made it clear that the old people in these districts enjoy various associations in spite of hard conditions of geography, distance or age, which support their life physically and psychologically. This study gives us some hints for supporting one another in our aging communities.

*Keywords : The Old People , Community , Various Associations , Support of Life ,
Aging and Depopulated Districts*

高齢者、コミュニティ、多様なつきあい、生活支援、高齢・過疎地域

I. 研究の背景と目的

出生率の低下と高齢者人口が増加を続け高齢化が進む現在、親世帯と子世帯の同居率は低下し、高齢者のいる世帯では、単身世帯及び夫婦のみの世帯の割合が大きくなってきた。介護認定が受けられなかった高齢者や要介護度の低い高齢者の生活支援は切り捨てられがちである。高齢者を取り巻くこのような状況下で、単身または夫婦のみの高齢者は特に、要介護に至る前の日常生活支援や緊急の事態発生に不安を抱いている。

とりわけ、高齢者の増加とともに高齢者単身世帯や夫婦のみの世帯が急増している過疎の農山村・漁村地域では、高齢者の日常生活を近くで支える利便施設はほとんど立地しておらず、若いマンパワーも少ない。また、これらの地域では公共交通の整備も遅れ、利便施設等は町の中心地などへ集中しているため、高齢者や交通弱者には住みづらい環境である。

本研究は農山村や漁村特有の地域コミュニティ、とりわけ高齢者のつきあいの広がりや生活支援にどのように活かしているかを明らかにし、地域のコミュニティの残存の確認と、高齢社会における地域相互扶助の可能性を検証するための知見を得ようとしたものである。

II. 研究の位置づけ

橘と高橋*1は日常の生活レベルで人と環境がどのように関わり合っているのか、相互浸透関係に焦点を当て、個人の日常生活を支えている地域環境の質自体を捉え、延藤*2らは、高齢者一人ひとりの生活の把握を通じて、各高齢者の「安心」と「自立」の状況を知

り、それらが何によってもたらされるかを明らかにすることで、総体として地区の備える力を解き明かした。また、登張*3らは、「地縁」を新たに定義し、生活行動や人間関係の地域的広がりから、高齢者個人の生活を構造的に理解する視点を示した。一方、社会老年学分野で、前田*4は、老人を取り巻く生活環境の変化は老人の生活における友人関係の重要性が高まりつつあることを示唆しているとして、老年期の友人関係の機能的意義を明らかにした。このように、高齢者の生活行動や生活環境、現在の居住地での生活維持に関しては、多くの研究がなされているが、高齢者の日常生活における地域社会とのつながりに関して、相互支援に機能する可能性についての十分な知見は得られていないと考える。

III. 研究の方法

本研究では、高齢者に必要な生活支援、なかでも公的生活支援が直接対象としない生活支援においては、地域のコミュニティの重要な部分を占めるつきあいの広がりや大きな位置を占めるという仮説のもとに、自宅で生活をしている高齢者を対象に、親戚や近隣住民同士や遠距離の友人等によるつきあいの内容を明らかにし、空間的広がり、相手の年齢類型における広がり、世帯類型からみたつきあいの内容の広がり、外出支援からみた支援内容と支援者の広がり、日常のつきあいの内容の広がり・緊急時の対応可能者の広がり等が高齢者の生活を心身面で補償するという視点で分析と考察を行う。

なお、本研究におけるつきあいとは、「日常生活における私的で自発的なもので、二者間あるいはそれ以上の相互関係」と定義する。つ

* 鹿児島女子短期大学 教授

** 鹿児島大学 教授・工博

Prof., Kagoshima Women's Junior College
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kagoshima University,
Dr. Eng.

きあいの広がりとは、つきあいの相手の、人数・年齢の幅と、つきあいの行為の多様性、居住地の距離についていうもので、人数の多さ・年齢差の大きさ・つきあいの行為の多さ・距離の長さを「広がりがある」とし、広がりがあることが、地域での生活支援の可能性の大きさにつながると考える。

また、つきあいの内容には、「精神的行為-物理的行為」「日常的-非日常的（緊急時を含む）」「一方性-相互性」の相互関係と、「直接的-間接的」という関係がある^{注1)}。

①「精神的行為-物理的行為」：精神的行為とは、声かけや様子をみに行く、話をするなどで、物理的行為とは、野菜をあげる等のものを介する行為や買い物の代行等労働力を提供するものとした。【表5】の物理的行為は生活支援となるものであるが、精神的行為は、人の場合によっては生活支援となることから、つきあいと生活支援を分けずに調査した。対象が高齢者であることから、両行為間の違いが表れるか確認する。

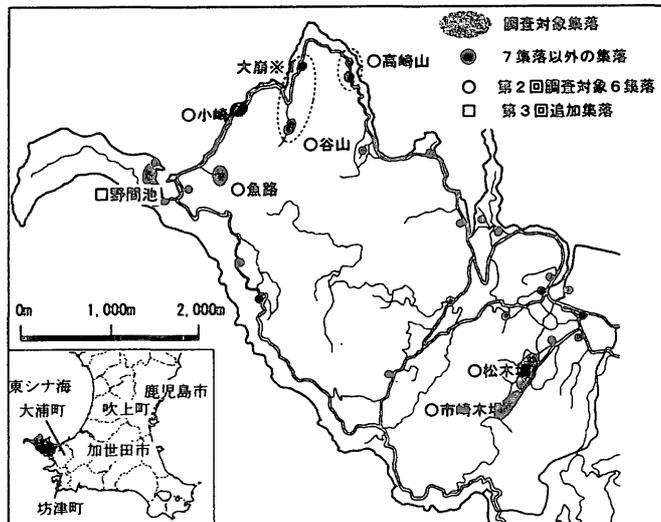
②相互関係：「してあげる」、「してもらう」、「お互いに行く」を意味する。年齢層や世帯類型による偏りがあるのかを確認する。

③「日常的-非日常的（緊急時を含む）」：単身高齢者や夫婦のみ高齢者の課題といわれる、非日常的（緊急時を含む）事態への対応について、日常のつきあいとの関連をみる。

④「直接的-間接的」：遠距離のつきあいの方法の分類。直接的とは、直接顔を合わせるつきあいで、精神的、物理的つきあいが可能ということになる。間接的とは、直接会わず電話・ファックス・手紙等を用いたつきあいのことである。生活支援を期待できる範囲が精神的・物理的のいずれかをみる。

IV. 調査の対象と概要

本研究では、高齢化率42.2%（2001年）の鹿児島県笠沙町を対象地域とした。笠沙町は、町内に農・漁・山村集落を抱える、人口3951人（2001年）で高齢化、過疎化の進む町である。薩摩半島の西南端に位置し、周囲は東シナ海に面する典型的なリアス式海岸が続く。25の集落からなり町の一部に平坦地がある他はほとんど傾斜地である【図1】【表1】。



※1 谷山と大崩（おおぐえ）は、歴史的に同一で、谷山集落である。

図1. 笠沙町対象配置図

まず、笠沙町の40歳以上の向高齢者および高齢者のつきあいと地域活動への参加状況、外出行動等を全町のアンケート調査で把握し、その中で、つきあいが総じてよくなされ地形的特徴のある6集落を選定し、第2回調査を行なった。第3回調査では、第2回の対象集落に平坦地である1集落を追加して、7集落においてヒアリング調査を行った。概要は【表2】【表3】に示すとおりである。

1. つきあいの相手の居住地の空間的広がり

本研究で取り上げたような、高齢者が人口の大部分を占める集落

表1. 調査対象集落の概要

集落名	全人口 (人)*	高齢化率 (%)*	独居老人 世帯比率 (%)*	調査対象 世帯数 (戸)	地形特性 ※1	バス停からの 距離(m)※2		集落の 標高差 (m)※3
						最短	最長	
市崎木場	57	52.6	20.0	15	◎	1,670	2,300	30
松木場	74	62.2	37.8	17	◎	1,200	1,800	30
高崎山	15	80.0	54.5	5	○	100	570	85
谷山	35	51.4	27.8	10	○	100	570	50
小崎	16	37.5	33.3	4	△	20	400	8
魚路	40	57.5	23.5	13	○	290	625	46
野間池	263	35.7	18.3	28	△	40	410	8
町全体	3,951	42.2	23.8					

※1 ◎山麓地集落 ○急傾斜地集落 △平坦地集落

※2 バス停から集落内のある民家までの距離

※3 同一集落内の民家で最高地と最低地に位置するものの標高差

表2. 調査の概要

	【調査1】 アンケート調査	【調査2】 ヒアリング調査	【調査3】 ヒアリング調査
予備調査	1988年8月に実施 一部集落の高齢者、郵便局員等に予備ヒアリング	1999年6月に実施 調査1の結果から親戚や近隣同士によるつきあいが比較的行われている6集落を選定し、集落の特徴、施設配置を調査	2001年8月に実施 11月に事後調査 調査2の結果をふまえ、新たに平坦地である集落を一つ選定し、集落の特徴、施設配置を調査
調査時期	1998年11月	1999年7月～8月	2001年9月
調査対象	40歳以上の全町民	【図1】に示す○のついた6集落内の121世帯	【図1】に示す○のついた集落と、□のついた集落の計7集落の121世帯
回答者	40～64歳…895人 65歳以上…1264人 年齢不明…94人	75世帯48歳～64歳…14人 65歳以上…60人 年齢不明…1人	92世帯65歳未満…7人 65～74歳…37人 75歳以上…48人
回収率	40～64歳…68.4%	調査率*	調査率*
調査率*	65歳以上…85.5%	62.0%	78.0%
調査方法	笠沙町役場による、アンケート用紙の配布・回収	自宅を訪問してのヒアリング調査	自宅を訪問してのヒアリング調査
調査内容	近隣・親戚とのつきあい 地域の人々と高齢者のかかわり、地域活動への参加状況	日常生活行動、生き甲斐、子どもとの日常生活 友人・親戚以外の人とのつきあい 近隣・親戚とのつきあい 生活時間	高齢者のつきあいの相手とその内容、外出行動とそれに対する支援、緊急時の支援、身体状況や施設の利用等

*ヒアリング調査では、予約して調査に行ったが、当日、通院・デイサービスのため不在。

表3. 【調査3】・調査対象者の属性

調査項目	人(%)	調査項目	人(%)
性別	男 27(29.3)	年齢	65歳未満 7(7.6%)
	女 65(70.7%)		65歳以上～75歳未満 37(40.2%)
世帯類型	単身 33(35.9%)	75歳以上 48(52.2%)	
	夫婦のみ 29(31.5%)	職業	無職 67(72.8%)
	親子 23(25.0%)	農業 15(16.3%)	
	三世代 6(6.5%)	漁業 2(2.2%)	
その他 1(1.1%)	その他 6(6.5%)		
		無回答 2(2.2%)	

においては、居住年数の長さから親しいつきあいが想定されるが、一方、高齢者は、地形上の制約を受けやすくなりつきあいの空間的な広がりには大きくないと考えられる。ここでは、集落内、集落外と、つきあいのある両者の居住地の平面上の道のりを距離とする、2点からつきあいの内容を分析した。また、文献から*5、*6、*7、高齢者の徒歩限界が1kmであると仮定して、本研究では、「基礎生活圏」である「集落」外で、かつ、徒歩限界の1km以上の距離のつきあいがなされているかをみた。そのようなつきあいがある場合は、空間の広がりがあるとした。また、徒歩限界を超える距離のつきあいの誘因についても分析した。

1-1. 集落内・外のつきあいの広がり

集落はコミュニティの最小単位で、つきあいの行なわれる単位であり、生活を支え合う基盤である。購買施設や医療施設がない集落では、週に1、2回の頻度で買い物や通院の目的で集落外へ出かける人が多いが、集落外の人とのつきあいがあるとすれば、空間的広がりがあるとし、その内容、生活支援の有無を確認し、その要因を明らかにしようとした。

つきあいのある相手の居住地を、集落内、集落外でみると、集落内のみが58人/92人(63.0%)で相手数326人、集落内・外両方である人が34人/92人(37.0%)で相手数69人である。【表6】に集落内外のつきあいの広がりを見るため、のべ人数を示した【表6】^{注2)}。つきあいの各行為における相互関係の人数の集落内・外それぞれのつきあいのある人数に対する割合を【表4-1】【表4-2】に示す。集落内・外の人とのつきあいの内容を比較すると、集落内のつきあいが活発に行なわれており、お互いに行なうことが多いのに対し、集落外とのつきあいでは作った花や野菜をあげるといった物理的なつきあいが、声かけと同程度行なわれていて、してもらうことが多い。このことは後期高齢者が多いことと関連があるものと考えられる。集落内では、様子をみたりなどの生活支援の実態が確認された【表4-1】。

高齢者が集落外の人とつきあうには、移動の容易さが関係する。相手が自宅に来て、つきあいの場合は自宅だけというつきあい方もみられる(【表7】の回答者No.5、No.6、No.8)。

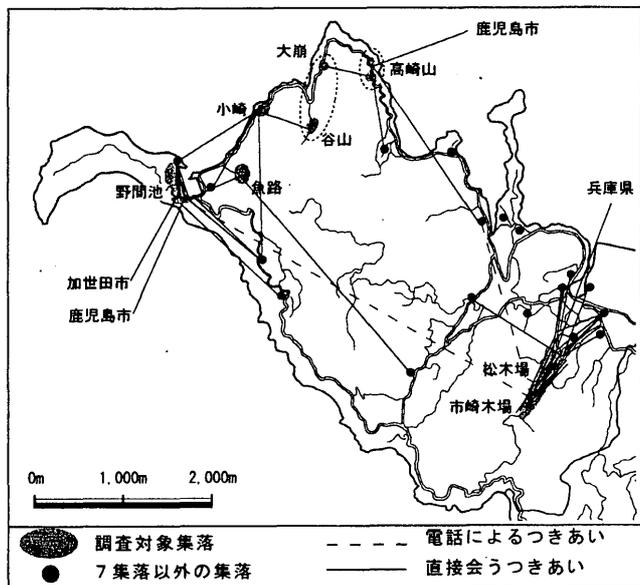


図2. 集落外のつきあい

表4-1. 集落内のつきあい

	してあげる (%)	してもらう (%)	互いに行う (%)
1	9.8	6.1	46.6
2	2.5	4.9	21.5
3	4.9	4.9	16.6
4	2.8	0.9	14.4
5	10.7	12.9	31.3
6	7.1	7.1	23.6
7	2.1	2.1	2.5
8	0.6	7.4	2.5
9	0.3	0.0	0.0
10	0.6	0.3	2.8
11	2.1	3.4	0.3
12	6.7	10.7	0.0
13	0.6	0.6	0.0
14	1.2	0.9	0.0
15	1.8	0.6	0.6
16	5.2	2.8	7.4
17	0.3	1.5	2.1
18	1.8	0.9	2.1
19	0.9	1.2	0.0

*分母は集落内の人とつきあいのある人(92人)

表4-2. 集落外のつきあい

	してあげる (%)	してもらう (%)	互いに行う (%)
1	7.2	10.1	23.2
2	0.0	11.6	11.6
3	0.0	1.4	7.2
4	1.4	10.1	8.7
5	7.2	18.8	10.1
6	1.4	5.8	2.9
7	0.0	2.9	0.0
8	0.0	2.9	0.0
9	0.0	1.4	0.0
10	0.0	10.1	0.0
11	0.0	0.0	0.0
12	1.4	7.2	0.0
13	0.0	0.0	0.0
14	0.0	1.4	0.0
15	0.0	0.0	0.0
16	0.0	0.0	0.0
17	0.0	1.4	2.9
18	0.0	0.0	5.8
19	0.0	0.0	0.0

*分母は集落外の人とつきあいのある人(39人)

表5. つきあいの内容

[精神的]	[物理的]
1. 元気か声をかけたり、様子をみたり	10. 病気の時の看病
2. 相談したり、されたり	11. 病院への付き添い
3. (災害や緊急時で)不安や心細いときの話し相手	12. 車に乗せてあげる、もらう
4. さびしくて人と話をしたいときの話し相手	13. 郵便物をだしてあげる、もらう
5. 作った花や野菜をあげる	14. 薬をとってきてあげる、もらう
6. 料理やいただきもののおすそ分け	15. 配達物をあずかる
7. 代わりに買い物	16. 葬儀の手伝い
8. 力仕事の手伝い	17. 不在の時の花のみずやり
9. 家事の手伝い	18. 食事をいっしょにする
	19. その他

1-2. 集落外のつきあいと距離

調査対象7集落の人の、集落外の人とのつきあいを地図上にプロットして見ると、相手の居住地は、集落周辺地域に限らず、町内全域に広がりが見られる【図2】。距離・移動の方法にかかわらず、後期高齢者でもつきあいの中で生活支援を行っている。集落外の人とのつきあいの概要を、【表7】に示す。集落内・外両方でつきあいのある34人について、つきあいの相手の年齢、相互関係、相手宅との距離、頻度を表した。集落外の相手69人中、8人が間接的方法の電話だけのつきあいである。集落外の人との距離(道のり)は、町内では120mから8km、町外では、車で2時間の鹿兒島市や県外に及ぶ。

松木場と隣接している市崎木場の場合、1km以上と距離が遠いにもかかわらず、後期高齢者でもつきあいをしており、週に1、2回ないしは毎日のように後期高齢者同士が直接会うつきあいもされている。その人たちは、この地域で毎日のように行く習慣であるお墓参り^{注3)}のついでや、畑に行くときや、買い物に行くときに相手と会っている^{注4)}。自転車を使う人もいるし、手押し車を押しながら歩いて行く人もいる。つきあいの相手の近辺に畑やお墓があることが徒歩限界を超えるつきあいの大きな要因となると考えられる【図3】。

1-3. 集落内のつきあいと三次元空間の広がり

調査対象者のほとんどが、集落内で複数の相手とつきあいがあり、その範囲は、自宅周辺だけでなく、全域にわたり水平的にも高さの面でも三次元の網目状に広がっている。水平距離移動と比べて、高低差の移動の負荷は、3~5倍といわれるが、魚路集落のように、谷

あいの傾斜地にある標高差の大きい集落でも長径 284 m、短径 153 m、標高差 30 m 余りの空間において、精神的、物理的つきあいが行われており【図 4-1】、地形によらず、集落全体に広がるつきあいが行なわれている。ただし、谷山集落の一部となっているが約 1km 離れている大崩（おおぐえ）と谷山の人々と、大きな谷で集落が地形上二分されておりさらに急傾斜の道の上がり下りが必要な高崎山集落の「谷の向こう」とこちらの人々の間では、物理的なつきあいは少ない【図 4-2】【図 4-3】。しかし、高崎山では、毎月 1 回、公民館での集落の集まりがあり、大崩も毎月 1 回、谷山集落の公民館での集まりがあり、いずれも交流の機会がある。なお、谷山集落の世話係の主事は大崩の人の買い物の代行をしたり、谷山公民館での集まりの時には車に乗せる支援をしている。

2. 年齢類型によるつきあいの広がり

高齢者は身体的・精神的な機能の低下から、つきあいの相手を改めて求める意欲がなくなることもあり、高齢になるほどつきあいの相手の居住地やつきあいの内容などの広がりがなくなるのではないということから、後期高齢者を主としてつきあいの広がりをみた。

年齢層は後期高齢者（75 歳以上）、前期高齢者（65 歳から 74 歳）、向高齢者（45 歳から 64 歳）^{*8} の 3 つに分けた。

2-1. 後期高齢者のつきあい

後期高齢者は、異なる年齢層の人とのつきあいがなされており、集落外に居住する人とつきあいがあることから、後期高齢者であっても、一概につきあいが同年齢層のみに偏ったり集落内だけに縮小したりしているわけではない【表 8】。

生活支援が必要になるといわれる後期高齢者の最も多いつきあいの相手は前期高齢者で、次に後期高齢者である。それぞれと、後期高齢者の 79.2%、66.7% がつきあいがある。

後期高齢者 48 人中 11 人（22.9%）は年齢層全体にわたるつきあ

表 6. つきあい相手の居住地と相手ののべ人数

集落	市崎木場	松木場	高崎山	谷山	小崎	魚路	野間池	合計
高齢者数 *1)	30	46	12	18	6	23	94	-
回答者数	15	17	5	10	4	13	*2) 28	92
つきあいの相手	集落内	39	69	14	42	13	63	86
	隣の集落	20	4	1	0	2	0	12
	町内	2	10	4	1	3	2	4
	町外	0	1	1	1	0	0	1
	合計	61	84	20	44	18	65	103
友人数の平均	4.1	4.9	4	4.4	4.3	5	3.7	4.3

*1: 2001年4月1日 笠沙町資料

*2: 調査対象を集落の平坦地に絞ったため、高齢者数に対する回答者数の割合が少ない

いがあり、約半数は相手に向高齢者がいる。年齢層の広がりが、生活支援の可能性の広がりとなる。相手が後期高齢者のみという人は 78 歳から 90 歳までの 6 人である。

後期高齢者全体の相互関係は、彼ら同士で行うつきあいが最も多い。後期高齢者は、【図 6-1】【図 6-2】に見られるように、彼らより若い人からしてもらうことが多い。

後期高齢者と前期高齢者とのつきあいでは、向高齢者とのつきあいよりも、お互いに行くことやしてもらうことが活発で、特に、お互いに行く声かけや、相談が多い。また、作った花や野菜やいただきもの等を前期高齢者にあげることも、もらうことも多い【図 6-2】。

後期高齢者同士では、他の年齢層とは異なり、精神的なつきあいの多様さと多さがみられる一方、物理的なつきあいは、前期高齢者とのほうが活発である【図 6-3】。

向高齢者とのつきあいでは、してもらうことが後期高齢者同士の場合よりも多い。その内容は車に乗せてもらったり、買い物や力仕事をってもらうことで、他に草取りやゴミ捨てもある【図 6-1】。

2-2. 前期高齢者のつきあい

前期高齢者は他の年齢層よりも後期高齢者にしてあげることが多い。つきあいの内容では、元気か声をかけたり、作った花や野菜をあげることが多く行われている。前期高齢者で、前期高齢者につきあいのある人の割合は 89.2%、同じく、後期高齢者につきあいのある人の割合は 81.1% である【図 6-4】【図 6-5】。

3. 世帯類型からみたつきあいの広がり

子どもと同居していない高齢者がどのようなつきあいを行っているかを知るため、単身世帯と夫婦世帯を抜き出して分析を行った。

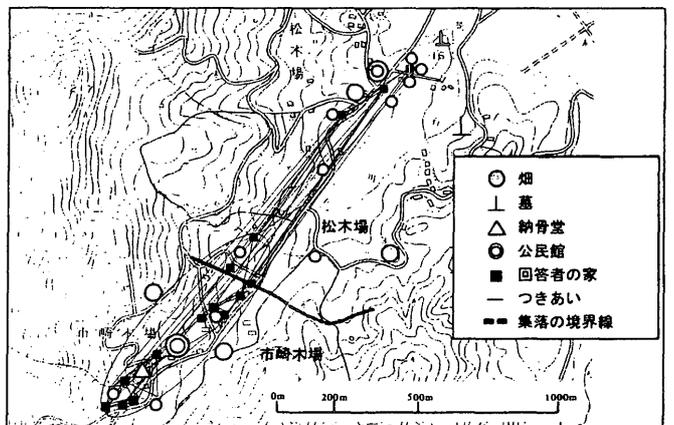


図 3. 市崎木場の人が行く墓、畑

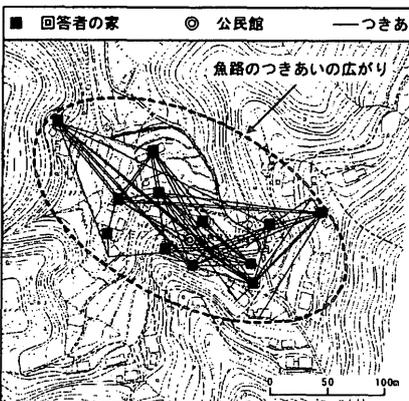


図 4-1. 魚路の人のつきあい

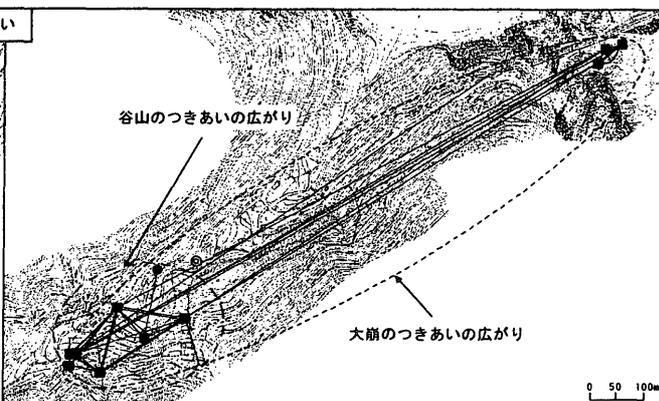


図 4-2. 谷山の人のつきあい



図 4-3. 高崎山の人のつきあい

表7. 集落外の人とのつきあいの概要

回答者No.	性別	年齢	相手の年齢	つきあいの内容 3)	相手の集落 4)	距離 5)	頻度 6)	備考
1	2	75	86	+(1,2,3,4,5,6,10)	2	1060	○	(71歳宅)
			65	±(1,2,5,6)	2	1170	○	
2	2	71	74	±2	2	1600	▲	
			75	±1	3	12700	□	
3	2	75	76	±1	3	5100	□	電話
			73	-17	2	830	▲	
4	2	69	65	+5	2	700	●	
			70	-(1,5,7,12)	2	600	▲	
5	2	*87	86	+1	2	550	▲	
			69	-1,5	2	280	▲	
6	1	71	55	-(1,2,5)	2	140	▲	
			65	±5	2	1200	▲	
7	2	73	72	-5	2	850	▲	
			70	-5	2	730	▲	
8	2	86	86	+(5,6)	2	840	▲□	
			75	-(1,2,3,4,5,6,10)	2	1100	○	
9	2	80	75	-1,+5	2	1040	▲	
			72	-(2,3,4,5,6,10)	2	860	○▲	
10	1	80	72	-(2,4,6,7,8,9,10)	2	750	○▲	
			78	-(2,4,5,6,10)	2	700	○▲	
11	2	73	95	-(2,4,6,10,14,17,18)	2	700	○▲	
			81	-	2	1400	-	
12	2	72	75	±(4,18)	3	650	▲	
			81	±(1,2)	2	1570	▲□	
13	2	67	81	+1	3	1060	▲	電話
			70	-	3	780	-	
14	2	67	61	-	3	1240	-	1回/2ヶ月
			82	+4	3	1220	□	
15	1	69	72	±(1,4)	3	1400	●	
			45	±1	4	町外	▲	
16	2	*74	76	±1,-2,±5	2	1030	○▲	
			52	-4	3	3110	?	
17	1	78	67	-	3	1100	-	2,3回/週
			63	-	3	1560	-	
18	2	*76	72	-12	3	1120	●	
			72	-6	2	(1740)	□	
19	2	*82	79	+1	3	1800	▲	
			80	+1	3	1800	▲	
20	2	56	74	+1,-6	3	1800	▲	時々
			60	-12	3	4700	□	
21	1	56	65	-8	4	-	?	時々
			70	-	2	-	●	
22	2	*69	57	-	3	2360	-	
			65	-	3	2770	-	
23	2	*77	65	-5	2	2000	□	病気のとき
			66	-5	2	2000	□	
24	1	62	65	-	3	4480	-	
			36	-	3	?	-	
25	1	81	66	-10	3	2060	●	
			72	±(1,5,18)	2	410	○	
26	2	80	70	±(1,5)	2	220	○	おすそ分け 7)
			74	±(5,6)	2	-	●	
27	2	*77	72	±(5,6)	3	120	●	おすそ分け 7)
			74	±(5,6)	2	150	○	
28	1	68	74	±(5,6)	2	180	○	天気の悪いとき
			64	±1	2	470	●	
29	1	68	68	±(1,2,3,4)	2	470	○	天気の悪いとき
			80	-5	3	3970	□	
30	1	86	74	±(1,2,3,4)	2	470	○	
			78	-(1,2),±(3,4)	2	410	○	
31	2	*83	45	±(3,4),-10	4	-	□	電話
			72	±(1,2),±(3,4)	3	1500	▲	
32	2	*78	74	±1,-(12,18)	3	1500	▲	
			80	-1,+ (5,18)	2	540	○	
33	2	72	83	+5	3	2320	▲	
			67	±(1,2,3,4),-5,+12	2	1350	○	

- 1) 1:男性, 2:女性
- 2) *は、単身世帯者
- 3) つきあいの内容で、数字は行為を示す。表5参照。-は、無回答。
+:してあげる, -:してもらう, ±:相互に
- 4) 1:集落内, 2:隣の集落, 3:町内, 4:町外
表中の-は無回答を表す。
- 5) 相手宅までの距離。(単位:m)
[塗りつぶし]は1000m以下, [白]は1000m以上を表す。
- 6) ○:ほぼ毎日 ▲:1, 2回/週 □:1, 2回/月 ●:その他
- 7) 少ないものでも近所同士で分け合っている生活が伺える。

表8. 年齢類型別つきあいの相手の年齢類型

回答者年齢	つきあいの相手数(人)		
	向高齢者	前期高齢者	後期高齢者
向高齢者(7人)	8	12	8
前期高齢者(37人)	42	72	61
後期高齢者(48人)	36	79	73

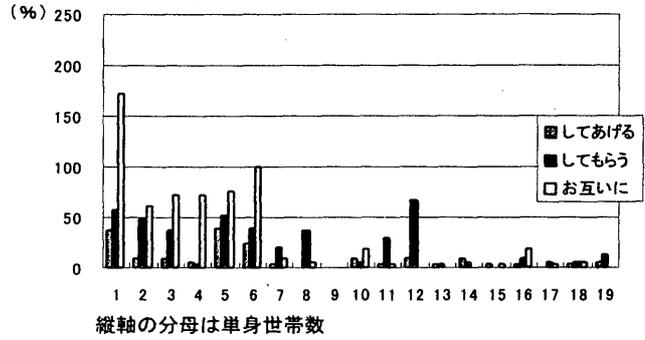


図5-1. 単身世帯の相互関係

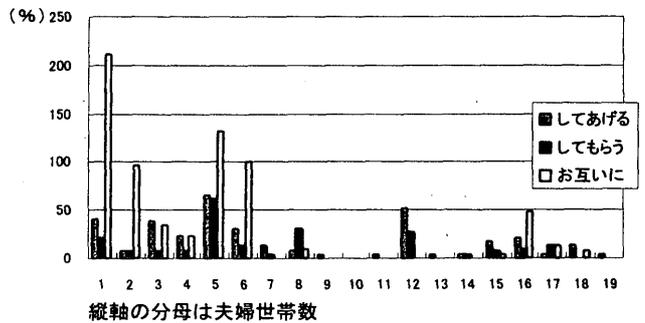


図5-2. 夫婦世帯の相互関係

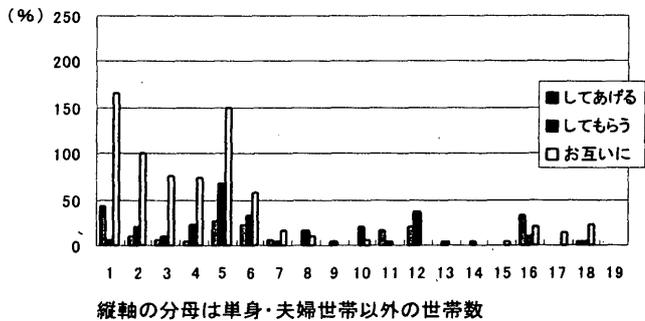


図5-3. 単身・夫婦世帯以外の世帯の相互関係

単身世帯は33世帯、夫婦世帯は29世帯である。単身世帯は全員高齢者で、平均年齢は78.2歳、また25世帯(75.8%)は後期高齢者で、一般的に生活支援が必要といわれる世帯、年齢である。夫婦世帯の26世帯は高齢者のいる世帯である。特に、単身世帯と高齢者のいる夫婦のみの世帯は、緊急時の対応についての不安を抱えているが、それについては、「5-2. 緊急時」で述べる。

3-1. 単身世帯のつきあい

単身、夫婦世帯ともに、精神的・物理的なつきあいが多く、単身世帯は夫婦世帯よりも、災害等で不安な時や、話をしたい時に話しをするという精神的なつきあいが多く【図5-1】。相互関係では全体として、お互いに行うことが最も多く、してもらうことも多い。元気か声をかけられたり、料理やいただきもののおすそ分けや、車に乗せてもらう等のほかに、他の世帯ではほとんどない、買物、力仕事、病院への付き添いなどもしてもらっており、多様な面で、単身

世帯の生活支援がなされている。

3-2. 夫婦世帯のつきあい

夫婦世帯は、元気が声をかけるというつきあいと、作った野菜や花をあげるというつきあいが、同じくらいよく行われている。料理やいただきもののおすそ分けは、単身世帯より多く行われているが、してもらうことは力仕事が少ない程度で、単身世帯と比べるとはるかに少ない【図5-2】。

4. 移動目的と外出支援からみたつきあいの広がり

笠沙町の医療施設は、野間池診療所と0医院の2ヶ所である。また、野間池以外の調査対象集落には購買施設がないので^(注5)、人々は、集落外や町外の医療、購買施設も利用している。このような地域で、高齢者の生活に不可欠で、切実な問題である通院や買い物における外出支援をみた。

4-1. 移動目的からみたつきあいの広がり

通院している人は79/92人おり、連れ立って行く人は33人いる。その中で、集落外の別居者が付き添って、町内や加世田市や鹿児島市の医療施設に通っている人が4人いる。また、近所の仲間、バスや自家用車で加世田市まで行く人たちもいる^(注6)【図7】【表9】。

市崎木場や松木場は、大浦町と加世田市に近いことから、通院先も大浦町と加世田市の病院がほとんどである。加世田、大浦には連れ立って行く人が多く、その相手は、同居の家族や別居子や近所の人などである【表9】。利用している町外の医療、購買施設は、集落

により所要時間が異なるが、バスで40分の大浦町や1時間余りの加世田市、それよりも遠い吹上町、車で2時間の鹿児島市の施設等である。バスの利用者は3人で他は自動車である。

買い物に連れ立って行く人は27人いる。買い物については、買まわり品ともより品に区分した。一緒に行く相手に集落内の人や同居子、夫・妻の他に、集落外の人が5人いる。1人は以前近所で、現在隣の集落に住んでいる人、4人は町内の別居子である。加世田市や野間池に連れ立って通院、買い物に行く理由は、車がない、足が悪い、体が健康でない等で、支援の必要性が大きいことが明らかである。実際に買い物の代行や同行、通院の付き添いや連れ立って行くという生活支援のつきあいが行われている。

4-2. 移動支援からみたつきあいの広がり

交通手段は自家用車と1日9本のバスである。34人の回答者が合計40人から車に乗せてもらうと答えている。回答には、雨の日や道であったときに集落の人が乗せてくれるというものもあった。集落外の人にさせてもらうという人は5人おり^(注7)、1、2回/週から1、2回/月の頻度である。車に乗せてあげる人が15人いる。その内の3/4は高齢者で、78、79、81歳もいて、老老支援の一面を表しているといえる。

5. 日常、緊急時のつきあいの内容のひろがり

5-1. 日常のつきあい

つきあいの内容を「精神的-物理的」「相互作用」「頻度」からみた。

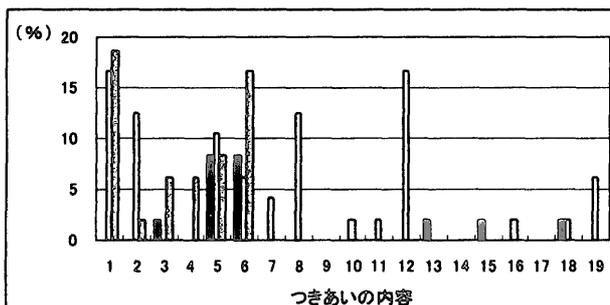


図6-1. 向高齢者とつきあいがある後期高齢者の割合

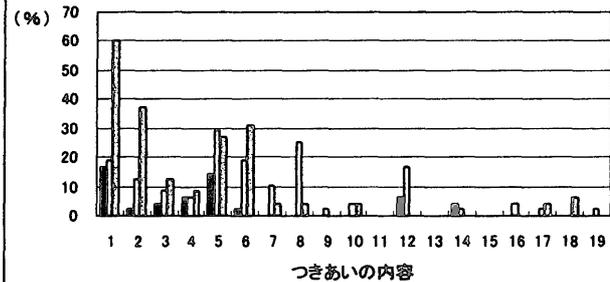


図6-2. 前期高齢者とつきあいがある後期高齢者の割合

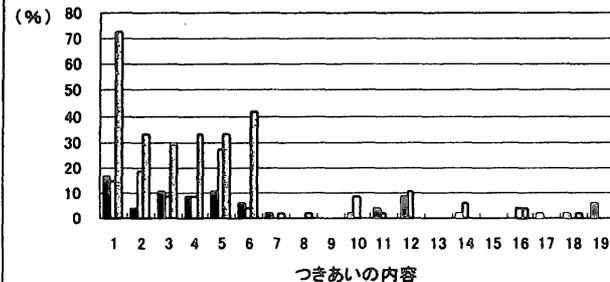


図6-3. 後期高齢者とつきあいがある後期高齢者の割合

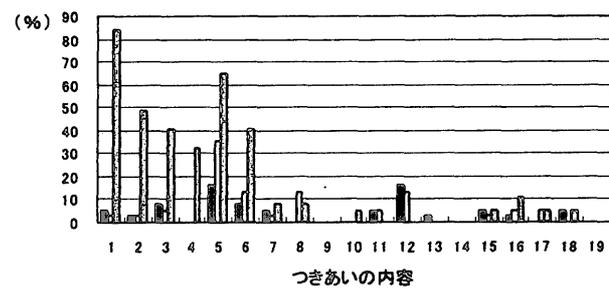


図6-4. 前期高齢者とつきあいがある前期高齢者の割合

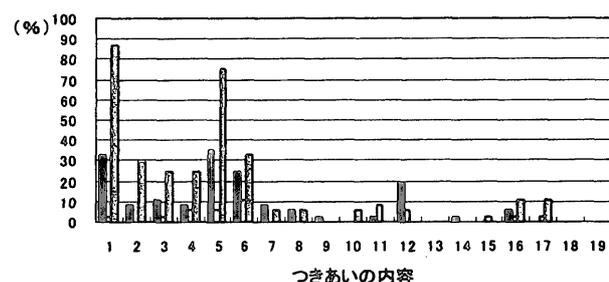


図6-5. 後期高齢者とつきあいがある前期高齢者の割合

凡例) ■ してあげる □ してもらう □ お互いに
*横軸の1~19の内容は下に記す。

【精神的】	【物理的】
1. 元気が声をかけたり、様子をみたり	10. 病院への付き添い
2. 相談したり、されたり	11. 病院への付き添い
3. (災害や緊急時) 不安や心細いときの話し相手	12. 車に乗せてあげる、もらう
4. さびしくて人と話をしたいときの話し相手	13. 郵便物をだしてあげる、もらう
【物理的】	14. 薬をとってきてあげる、もらう
5. 作った花や野菜をあげる	15. 配達物をあずかる
6. 料理やいただきもののおすそ分け	16. 雑貨の手伝い
7. 代わりに買い物	17. 不在の時の花のみずやり
8. 力仕事の手伝い	18. 食事をいっしょにする
9. 愛の手伝い	19. その他

図6. 前期高齢者と後期高齢者のつきあい

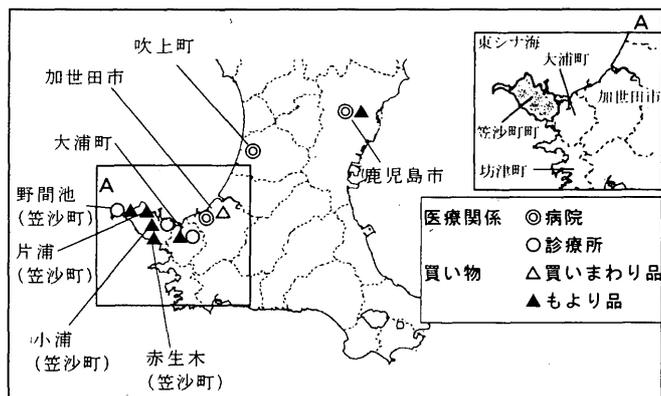


図7. 通院・買い物先

表9. 通院・買い物の外出支援

通院先 (単位:人)		買い物先 (単位:人)		連れ立って行く人	通院 (人)	買い物 (人)		
合計	連れ立って行く人	合計	連れ立って行く人					
加世田市	32	17	加世田市 38	16	配偶者	9	4	
大浦町	10	7	大浦町	12	3	同居子	5	5
小浦	14	8	赤生木	19	2	別居子	5	4
野間池	26	3	小浦	5	0	近所の人 *1)	12	*2) 13(1)
鹿児島市	3	1	片浦	3	0	親戚	2	0
吹上町	2	1	野間池	46	4	不問	-	1
利用しない	13	-				合計	33	27

*1) バス2人、自動車10人
 *2) (1)は内数。以前近所の数回答

表10. 緊急時に頼れる最も近い人の居住地

家族形態	頼れる人	集落内							合計	
		隣	近所	その他	町内	近隣町	県内	その他		
単身世帯		8	15	2	1	2	2	1	2	33
子		2	2	1	0	2	2	1	-	10
親戚		5	5	0	1	0	0	0	-	11
その他		1	8	1	0	0	0	0	-	10
なし		-	-	-	-	-	-	-	2	2
夫婦世帯		4	12	0	4	2	1	1	5	29
子		0	0	0	3	2	1	1	-	7
親戚		1	8	0	1	0	0	0	-	10
その他		3	4	0	0	0	0	0	-	7
なし		-	-	-	-	-	-	-	5	5

物理的なことが精神的なことにつながるといえるが、厳密に「精神的-物理的」と分けることはできない。精神的つきあいは、声かけや話し相手になる、相談にのるなどで、生活支援につながるものであり、場合によっては生活支援である。物理的つきあいは、生活支援といえるものである。精神的つきあいは労力や物を介しないので高齢者でも大きな負担を感じないで行える一方、作った野菜や花をあげるには、畑や庭が必要であるが多くの高齢者が自分で育てるので、行われやすい状況である。

実際に行われているつきあいの内容は多様であるが、全体のつきあいで、精神的なつきあいの、元気か声をかけたり様子をみたりすることが最も多く行われている。次に、物理的なつきあいの、作った花や野菜をあげることが多く行われており、料理やいただきもののおすそ分けや、相談したり、されたりが続く。研究の方法で定義した精神的、物理的つきあいにより分析した結果、生活支援の実態の確認と、生活支援につながるつきあいの広がりがあることが確認できた。

「相互関係」からは、精神的なつきあいや物理的なつきあいの多さに多少の違いはあるものの、「お互いに行く」ことは「してあげる」、

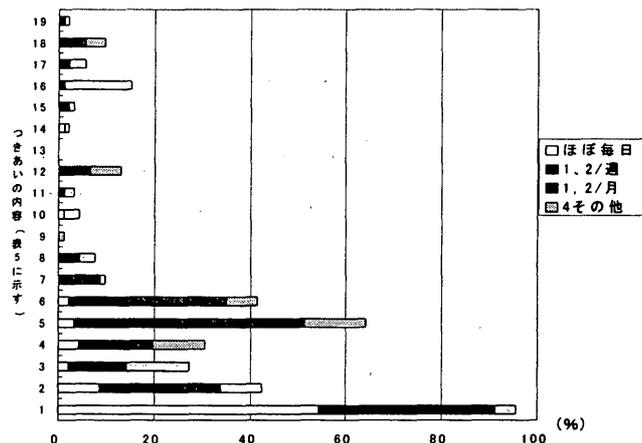
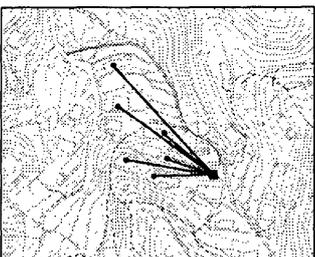
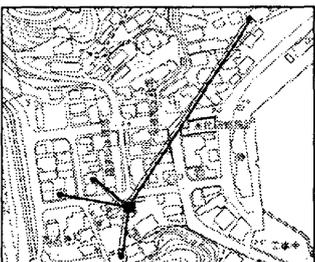


図8. つきあいの内容別頻度



67歳。集落の主事が電気がついていないときはたずねて行くなど気をつけている。作った花や野菜をあげたりもらったりしている。台風時には近くのひとり暮らしの人の家に避難した。

図9-1. 単身高齢者のつきあい(事例1)



87歳。娘が鹿児島市から月に3、4回帰ってくるし、近くの友人とは毎日お互いの家を行き来して、精神的にも物理的にも活発なつきあいをしている。

図9-2. 単身高齢者のつきあい(事例2)

「してもらう」という関係の2~3倍であることが明らかになった(ここでいう、つきあいの多さとは、以上3つの関係にある相手の人数の合計の大きさをいう)。以上の調査結果から、相互支援が多いことは、農山漁村社会の特徴であると思われる。

「つきあいの頻度」は、元気か声をかけたり、様子をみたりすることをほぼ毎日行う人が全体で54.3%、週に1、2回が32.6%いる。作った野菜や花をあげるのは週に1、2回か、月に1、2回が多い。複数の相手から毎日のように声をかけられたり、時々花や野菜をもらったりあげたりという状況であることが伺える【図8】。

5-2. 緊急時

高齢者の場合、緊急時の対応や支援が重要な課題である。緊急時に頼れる、最も近い人が集落内に居住していると回答した単身高齢者は、25/33人、夫婦世帯で17/29人である。一方緊急時に頼れるのが子どもと回答した単身高齢者10人のうち、集落内に子どもが居住している人は2人である【表10】。単身高齢者8人は、緊急時に頼れる人として、集落内の人をあげなかったが、近所の人と道端で声をかけあったり、互いの家を行き来して、自分で作った花や野菜をあげたり料理やいただきもののおすそ分けをする、車にのせてもらうなど日常的につきあいをしている。8人のうちの2人

のつきあいの様子を【図9-1】【図9-2】に示す。単身高齢者は、日常的に安心の中で生活できる状況にあるといえる。

また、単身高齢者で別居者とほとんど交流のない人が2人いるが、近所の人と日常的つきあいがされており、それぞれ緊急時には、近所の人や隣の従兄弟を頼れるとしている。集落によっては、世話役の主事が安否確認を行っているところもあり、子どもなどが支援できない部分を、地域の日常的なつきあいが補完している。

V. まとめ

高齢・過疎の農山村地域における高齢者のつきあいが、空間、年齢、世帯類型、つきあいの内容、相互関係において広がりを持つことが確認できた。

高齢化した農山村では、子どもと別居している世帯が多く、しかも別居の子どもの居住地は町外などの遠距離が多く、日常生活の援助は期待できない状況にある。また高齢者は、精神的、身体的衰えから、つきあいの内容、つきあいの相手の居住地等の広がりがなくなることが懸念されるが、後期高齢者が、回答者の49%近くを占める地域でありながら、本調査対象7集落では、お互いに元気か声をかけるなどの日常の精神的つきあいはじめとして、自分で作った花や野菜をあげたりもらったりという多様な内容のつきあいがなされている。後期高齢者のつきあいでは、向高齢者に買い物や力仕事をしてもらうなどしており、年齢の広がりの中で、生活支援がみられる。つきあいと距離との関係では、平坦地や緩勾配で連続している集落間では、日常的つきあいに高齢者の徒歩圏を越えた広がりがあり、地形が険しくレベル差の大きい集落でも、集落全体に広がるつきあいがされており、高齢者のつきあいは一概に同年齢層のみに偏ったり、集落内だけにおさまっているわけではないことも明らかになった。移動が困難な場所では、電話でのつきあいや、月に1回の公民館の集まりを通して、あるいは集落の世話役が移動の支援などをして、コミュニティの維持に努めている。

また、現行の生活支援として、通院、買い物に連れ立っていくことを、近所の人を始めとして、他にも親戚、別居子等が行っており、いわゆる老老支援が行われている。

高齢単身世帯は、夫婦のみ世帯よりも、不安なときやさびしいときに話をしており、また、自動車に乗せてもらう、買い物の代行、力仕事、病院への付き添いなどの支援を受けている。つきあいの広がりがもたらす地域の複層のネットワークにより、緊急時の支援・対応への安心につながる生活環境となっている。

本論文では、農山漁村に生活する高齢者のつきあいの広がり、地域における高齢者の生活支援を確認した。今後は、高齢社会の中で、地域の生活支援の機能を維持・発展させれば、高齢者が最期まで幸せに生活できると考える。

謝辞

本研究の調査に協力していただきました笠沙町の方々に厚く御礼申し上げます。

注

注1) 本論文でいうつきあいの内容は、【表5】の1～19の内容を示す。

注2) 市崎木場の3人は居住地は松木場でつきあいは市崎木場である。

注3) 鹿児島県では、夏季は特に生花を枯らさないように毎日お墓参りする習慣

がある。花卉の消費額は全国一といわれる。

- 注4) ①75歳・女性:約1.2kmの親戚宅近くの畑に毎日行く。ついでに71歳宅に寄り、声かけ、相談に乗る、作った花や野菜をあげる、料理やいただき物のおすそ分けなどを行う。②71歳・男性:約1.2kmの親戚が、週に1、2回自宅近くの畑に来る。その時に寄ってくれるので、作った花や野菜をお互いにあげたりもらったりする。③86歳・女性:約1.1km離れた75歳の親戚がほぼ毎日来てくれる。自宅の近くにその人の畑がある。
- 注5) ①町内の移動販売車の利用者は47.8%である。集落に来る移動販売車の2、3回/週の利用や、町役場に隣接している高齢者生活福祉センターにデイサービスで行った時に、そこに来る移動販売を利用する等のことからその必要性の高さがわかる。②電話注文による配達を42.0%の人が利用している。利用は1回/月が多い。
- 注6) ①近所で仲がよいからバスで50分の加世田市へ行く。
②79歳の女性が、近所の72歳と74歳と88歳を自分の運転する車に乗せて週に1回、隣町の大浦町の病院へ行く。
③週に1回、加世田市(車で1時間)から来るリーニングやさんの車に乗せてもらったりバスで行く。
④別居子の居住地は、近隣集落が3人、車で約2時間の鹿児島市が1人。鹿児島市に週に1、2回通院する人には、鹿児島市の娘2人が迎えに来る。
- 注7) ①87歳の女性は、70歳の隣の集落の人に、週に1、2回乗せてもらう。
②67歳の女性は、50歳の町内の人に2ヶ月に1回乗せてもらう。
③69歳の男性は、1.1km離れた集落に住む72歳の友人(漁仲間)に2、3週に1回乗せてもらう。
④76歳の女性は、4.7km離れた集落に住む60歳の甥(元隣に住んでいた)が、お墓参りに来た時に、月に1、2回乗せてもらう。
⑤78歳の女性は、1.5km離れた集落の亡夫の友人夫婦(夫72歳)に週に1、2回乗せてもらう。

参考文献

- 橋弘志、高橋鷹志:地域に展開される高齢者の行動環境に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.496, pp.85-95, 1997.6
- 延藤安弘:高齢者の「安心・自立居住」を「まち」で支える「地域力」の実践的研究, 住宅総合研究財団, 研究年報, No.26, 9823, pp.311-322, 1999
- 登張給夢, 竹宮健司, 上野 淳:農山村地域にみる高齢者の生活と地域との関係に関する事例的研究, 日本建築学会計画系論文集, No.540, pp.125-132, 2001.2
- 前田尚子:高齢期の友人関係—別居子関係との比較検討, 社会学年報28, pp.58-70, 1988
- 新建築学体系編集委員会, 新建築学体系18 集落計画, p.69, 彰国社1986
- 新建築学体系編集委員会, 新建築学体系21 地域施設計画, p.12, 彰国社1959
- 青木志郎:農村計画論, 農山漁村文化協会, p.299, 1984
- 佐久間政広:山村における高齢者世帯の生活維持と村落社会—宮城県七ヶ宿町Y地区の事例—, 日本村落研究学会, 村落社会研究, Vol.5(2), pp.36-47, 1999
- 染谷椒子:過疎地域の高齢者, 学文社, 1997
- 金子 勇:都市高齢社会と地域福祉, ミネルヴァ書房, 1993
- 染谷椒子:「ス」(家族はいま…)③ 老いと家族—変貌する高齢者と家族—, ミネルヴァ書房, 2000.10
- 総務庁:高齢社会白書, 1998
- 笠沙町郷土史編さん委員会:笠沙町郷土史(下巻), 笠沙町, 1993
- 玉里恵美子他:山村再生—21世紀への課題と展望—(村落社会研究34), pp.65-93, 1998.10
- 図説 集落, 日本建築学会編, p.174, 都市文化社, 1989
- 齋藤芳徳, 外山 義, 鈴木 浩:居住地域における高齢者の外出行動と人的交流に関する考察—在宅高齢者と施設居住者の比較研究—, 日本建築学会計画系論文集, No.532, pp.125-132, 2000.6

(2002年7月10日原稿受理, 2003年4月1日採用決定)